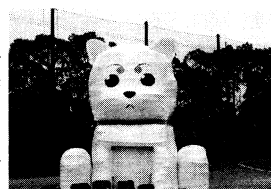


転出いたしました。生徒として三年間、教員として赴任して十七年間。本当に長い間、お世話になりました。



西校に転動してまず驚かされたのは、卒業して十五年が過ぎたにもかかわらず、お世話になった先生方がまだ何人も残ってみえたことです。さらには、西高を退職されたOBの諸先生方が、入れ替わり立ち代り幾度も訪問され、時には授業の様子を参観されました。諸先生方のお顔を拝見すると、瞬時に在校生モードにスイッチしてしまい、大変緊張しました。なにより教員として先輩として、後輩諸君の指導ができることはとても嬉しいことでした。

しかし、残念なこともありまして。伝統ある男子バスケットボール部は、私が顧問の間の二年間は県大会出場を逃してしまいました。チーム力は十分であったにもかかわらず、練習・公式戦の大切なポイントで適切な指示が出せなかったことが敗因だったと思います。天文部は、私が本校の高校一年生時に部員不足で休部しましたが、一年間の活動アピールの結果、二年時には復活することができ、十七年前の赴任時にも活発に活動していましたが、火星大接近のあと遠ざかる火星とともに部員数が減少し、廃部となってしまいました。OBとしてのサポートが足りなかったと悔やまれてなりません。

本校での教師としての後半は、生徒会部に所属し、主として生徒会・議会・文化委員会活動に参加

して、西高祭・予餞会の準備・運営に携わることができ、伝統の継承に微力ながら関わることができました。西高教員の前後に他校を経験して、あらためて西高生の活動意欲と集団帰属意識の高さに感服します。離任式では、在校生諸君を前に生徒会活動への積極的参加を呼びかけました。生徒会活動の火を絶やすことなく、地域に誇れる西高であつて欲しいと思います。

西高を離れることにはなりませんが、西高のますますの発展を願ってやみません。今後は、十五回生卒業生の一人として西高発展を応援していきたいと思えます。

「よき競争相手へ」

講師 岡田 佳美

私は、高校生として3年間、そして常勤講師として1年間、一宮西高校にお世話になりました。この4年間に思い返してみますと、本当に様々なことがありました。笑ったり怒ったり泣いたり励まされたり、そのどれもが掛け替えのない思い出です。その中で、強く印象に残っていることについて書きたいと思えます。

生徒として在籍していた、高校一年生の時、ある女の子と同じクラスになりました。私にはその子がとても輝いていて、自分には無い物ばかりを持っていて、感じるように感じました。そこで私は彼女をライバルと思つて頑張つてみることにしました。部



活も同じ条件にしなければいけないと思ひ、同じ部活に入りしました。それから怒涛の毎日でした。入った部活はまさに運動系文化部といつてもいいほどで、土日はほぼ毎回活動。平日の活動も時間一杯まで、というように部活漬けの日々。自分の時間を取ることもできないことに焦つた時期もありました。今になって聞いてみると、みんなも私と同じように感じていたようなのですが、周囲のみんなはずつと余裕があるように見えてしまつていたので。しかし、「時間がないのはあの子も一緒だ」と思えば、徐々に自分のペースを確立していくことができました。それと合わせて学校生活も自分の心も随分落ち着いていったのをよく覚えています。2年生まではおおよそそういう風に過ぎていきました。いよいよ3年生になりました。私のクラスは当初から空気が鋭いような、びりびりした雰囲気がありました。息苦しくも感じました。ですが、2年間の部活のおかげか、少し苦しいくらいがちょうどやりやすいと思うようになっていた私には、そのクラスは合つていたのかもしれません。何と言つても、そのクラスには私が1年生の時にライバルと思つた彼女がいました。目標が近くにあるのは幸運でした。3年生という1年間は、これまでの2年間とは比べることができないほどのものでしたが、彼女がいてくれたおかげで私は最後までやり切れたと思ひます。私は卒業した後、彼女に手紙を書きました。実は1年生のころからライバルだと思つていたこと、それから感謝の言葉と書きました。彼女から返事がきました。それに、「私もライバルだと思つたよ」という言葉がありました。

世の中には様々な高校がありますが、こういう学校は中々ないのではないのでしょうか。生徒が自分で自分のよき競争相手を見つけ、共に励まし合いながら目標に向かっていくことができる。そういう学校は稀だと私は思ひます。そしてさらに私が嬉しかったことは、4年ぶりに講師という立場で帰つてきた一宮西高校に、そういう校風が変わらずあつたことです。授業でも部活でも、私が目にした西高生は競い合いながら上に行くことを目指していました。その姿に「負けていけないな」といつも感じさせられていました。私の授業を聞いて「分かった」と感じさせることができれば私の勝ち、「よく分からないなあ」と思わせてしまえば私の負けだとそんな風に決めて、私は一つ一つの授業をまるで真剣勝負のように楽しんでいました。講師になつてからの私にとつてよき競争相手は生徒のみなさんでした。

一宮西高校には確かにこういうような伝統がしっかりと根付いています。多くの方々を支えられて、この伝統はこれからも続いていくでしょう。ですから私が望むのは、更なる飛躍です。一宮西高校にはそれをするだけの力があると私は信じています。まだまだこれからです。羽根もないのに飛べというのですから、この飛躍はきつと生半可な努力ではならないでしょう。しかしその飛躍の後には今以上に素晴らしい一宮西高校があります。これからの一宮西高校のますますの発展と活躍を祈つていきます。

同窓会費納入及び協力金のお礼

- 一、同窓会総会の開催
平成二十四年八月四日(土) 一宮スポーツ文化センターで開催。旧・現職員、一般会員合わせて百十五名の参加をいただきました。
二、「同窓会報」第二十七号の発行
平成二十四年七月七日に発行いたしました。
三、同窓会郵送料カンパの実施
今年度も別記のとおり実施いたしますので、ご協力よろしくお願ひいたします。
四、東京支部会の開催
平成二十四年十二月十五日(土) 新宿にて開催。西高側からは、鈴木校長、同窓生でもある丹下先生が出席され、合わせて二十名の参加がありました。
五、同窓会入会式および卒業記念品贈呈式
平成二十五年二月二十八日(木) に実施されました。第四十七回生三百十五名が同窓会に入会し、一般会員総数は一七、四〇七名になりました。また、卒業生には、卒業記念品として、証書筒を贈呈しました。